

# ナチスを支持した民衆の心理とその構造

池野民基（人間学コース）

（指導教員：堂園俊彦）

キーワード：ナチズム、大衆、フランクフルト学派、フロム

## 序論

アドルフ・ヒトラーは 20 世紀最大の独裁者であり、人類史上最悪の被害を出した、第二次世界大戦を引き起こした張本人とされる。ヴェルサイユ条約を無視して他国に侵略したこと、ユダヤ人差別を行い強制収容所にて大量虐殺を行ったこと、そして、プロパガンダにより真面目なドイツ国民を洗脳して、ドイツをあのような狂気に導いてしまったことなどが、その悪行として語られる。しかしヒトラーが「合法的」に、つまり選挙を通じて国民の支持を得て支配者になったということも事実である。

本論の目的は、悪の典型として捉えられることの多いナチスの全貌、本質を明らかにすることを通じて、「なぜドイツ国民はナチス、ヒトラーを支持したのか」という問いに答えること、そしてそれにより、民主主義を生きる我々が、ナチスのような過去の過ちを繰り返さないよう警鐘を鳴らすことである。

## 1章 ナチスの歴史

### 1節 ナチスの歩み

1919年に発足した「ドイツ労働者党」が1920年に改称し誕生したのが、ナチスこと「国家社会主義ドイツ労働者党（NASDAP）」である。ヒトラーが党に参加してからは、25か条要綱に示されているような、反資本主義、反ユダヤ主義を掲げて、バイエルン州を起点に徐々に全国で活動していった。インフレの危機が最も高まった1923年にミュンヘンで武装蜂起を起こしたが、警察に鎮圧されてヒトラーは投獄されることになる。このミュンヘン一揆から、彼は合法的に支持を得ていく路線に思いを巡らせるようになり、1933年には、ヒトラー内閣が成立し、その後の選挙では43.9%の投票を得て、大衆の支持を盤石なものとした。

### 2節 ヒトラーとは

イアン・カーショウによれば、彼の世界観は、本質的に次の4つの要素から成り立っている。一つ目は、歴史は人種間戦争であるという信念、二つ目は、急進的な反セム主義（人種主義的反ユダヤ主義）、三つ目は、ドイツの未来はロシアを犠牲にした「生存圏」の確保によってのみ保証されるという確信、四つ目は、これらすべてを統合する、マルクス主義（ソ

連の「ユダヤ=ポリシェヴィズム」を撲滅するための生死をかけた戦いである。

彼の自伝『我が闘争』（1925）においては、明確に反ユダヤ主義が掲げられ、彼のドイツとドイツ国民に対する情熱が綴られている。

## 2章 ナチスを支持した国民たち

### 1節 ナチズムの工夫

ヒトラーの理念は、反ユダヤ主義、反マルクス主義といったように明確に示されてはいたが、細部においては曖昧であった。各有力者が、ある程度の自由度があるヒトラーの理念と個人的利益を結びつけることが出来れば、ナチスに咎められることなく積極的な活動を行うことができた。これにより、有力者もナチスを支持した。

また、ナチスも、ヒトラーが持つカリスマ性を最大限利用した。彼が演説する集会は、政治集会というよりも宗教的信仰集会に近い盛り上がりを見せ、信者を魅了した。また、プロパガンダにより、国民的指導者にふさわしいヒトラー、ドイツに舞い降りたメシアとしてのヒトラーを作り上げ、大衆が主体となり、「理想の指導者」を支持したのだ。

### 2節 国民たちの心理

本節では、前節とは異なり、民衆視点による考察を行う。エーリッヒ・フロムは、ナチスを支持した国民の心理を説明している。彼によれば、人は孤独を何よりも恐れる。そしてナチスが支配する前のドイツでは、ドイツ国民は孤独に陥っていた。近代化によって中世社会のコミュニティから自由になった国民は個人化した。それと同時に孤独になってしまった。フロムによれば、孤独の解消方法は2種類存在する。一つは他者と自発的な関係を築くこと、もう一つは自由を放棄し何かに帰属することだ。当時のドイツ国民は、自由を放棄しナチスに帰属することで孤独の解消を図ることを選択したのである。

ナチスの支配体系の中にも、支持基盤となるものは存在した。それは、権威主義の下に生きる民衆に現れる、サディズム的衝動とマゾヒズム的衝動である。

マゾヒズム的な人間は、劣等感、無力感、個人の無意味さの感情に取りつかれている。マゾヒズム的に生きるものは、他者に依存する故、孤独は取り払われる。サディズム的な人

間は3つのタイプが存在する。他人を依存させ道具にしてしまうもの、他人を支配しようとするだけでなく、搾取し利用しようとするもの、そして、他人を苦しめ、または苦しむ姿を見ようとするものだ。サディズム的な人々もまた、彼が彼を支配する人を強く必要としているために、他者に依存している、孤独は解消される。

権威主義に生きる人々の本質は、サディズム的衝動とマゾヒズム的衝動の同時存在である。ナチスはこれらの衝動への欲求を見事に満たしていた。国のすべての権利を掌握したヒトラーに支配されることはマゾヒズム的衝動を満たし、アーリア人とユダヤ人の二項対立は、サディズム的衝動も同時に満たしたのだ。

### 3章 ナチス発生の精神

#### 1節 大衆の登場により構造転換するヨーロッパ

前章では、ナチスと民衆の両視点から、ナチスが支持された理由、構造について模索した。しかし、ナチズムの理解にあたって、ナチスが発生した後の構造を明らかにするだけでは不十分であるように思われる。この章では、ナチスが台頭した構造を明らかにするために、ナチスが登場する以前、どのようにしてナチス発生の精神が育まれたのかを、谷喬夫と、彼の解説するアドルノとホルクハイマーの思想をもとに分析する。

#### 2節 フランクフルト学派によるナチズムの説明

近代ヨーロッパにおいて、大衆の出現が社会に大きな構造転換をもたらした。1800年に比べ、1914年にはヨーロッパの人口は3倍に跳ね上がり、大衆民主主義の時代となった。政治的権力も大衆が持つようになり、大衆の主張を代弁する政党の政治的権力も高まり、「大衆民主主義複数政党国家」になった。このような国家で政治危機が生じると、議論を続けるだけの自由主義的議会制に代わって、強力な権威を持った指導者が待望されるようになる。こうして、大衆の登場が独裁者を待望することになり、ナチスのようなファシズムが支持されるに至った。

フランクフルト学派に属するアドルノとホルクハイマーによれば、ヨーロッパ文明は「自然支配的理性」が自然を支配することで発展してきた。しかし、その下では後にナチズムとして開花する「新しい野蛮の種」が育っていた。ホルクハイマーはこれを「自然の叛乱」と呼び、大衆が出現したことにより、この野蛮の種が秘めるエネルギーの総量はより多くなっていたとする。

それまで野蛮の種は、個人の犯罪行為や暴動となり社会に現れていたが、ナチズムも「自然の叛乱」として出現したのである。しかし、これまでの「自然の叛乱」と違い、ナチズムは合理的、理性的に暴力を正当化していた。すなわち、自然の叛乱の正に原因となった理性と暴力が、神話的な宥和を果たしたものがナチズムなのだ。

### 3節 フロムとの比較

「なぜドイツ国民はナチス、ヒトラーを支持したのか」という問いに対して、フロムと、アドルノ／ホルクハイマー両者による考察を明らかにした。この節では両者の比較、統合を目指す。

近代化により孤独になった個人が、新しいつながりを求め、それを提供したナチスに参加したと説明するフロムと、近代化し文明が発展していくのと同時に、社会や人々の中に渦巻く抑圧された自然がナチスという形で顕現したと説明するアドルノとホルクハイマーは、一見それぞれ別の主張をしているように思われる。

しかし、両者が相反することを主張しているかどうかについては、一考の余地がある。前述の通り、アドルノとホルクハイマーによるナチス登場の精神の土壌は、大衆の出現にある。彼らの理論は、大衆社会の出現を前提としているのだ。そして、その大衆社会は、それまでの封建的な社会から、様々な新しい生き方の選択を作り出し、様々な人生が出現した。すなわち、産業化をもたらしたのである。出現した大衆は、近代化の中で自由を手に入れ、そして孤立していったのである。これこそ、まさにフロムの主張そのものである。これにより、間接的にはあるが、アドルノとホルクハイマーの議論と、フロムの議論は結合可能なものだと考える。

### 結論

本論全体を通して見えてくるナチズムの本質は、大衆の存在である。ヒトラーの個人的権力に基盤を与えたのは大衆であり、大衆の心の弱さがヒトラーの台頭を許し、究極的には、大衆の出現の行き着く先がヒトラーであったのだ。

現代において話を置き換えると、恐ろしさがより一層増す。ヒトラーのような個人により狂気に走ったのではなく、その担い手は我々なのだ。我々はそれを自覚する必要がある。自由を重荷に感じ、それを手放したくなったり、常に理性的に生き続けることが辛く感じたりすることは仕方ないことなのかもしれない。しかし、それらの感情は、ナチスのような恐ろしい結果を生み出すスイッチになりうることを認識して、同じ過ちを繰り返さないようにしたい。

### 主要参考文献

- エーリッヒ・フロム著（日高六郎訳）『自由からの逃走』東京創元社 1951
- イアン・カーショウ著（石田勇治役）『ヒトラー権力の本質』白水社 1999
- 谷喬夫著『現代ドイツの政治思想 ナチズムの影』新評論 1995
- アドルフ・ヒトラー著（平野一郎 将積茂訳）『わが闘争 上 I 民族主義的世界観』角川文庫 1973